

授業を進めるときの目安となる児童 (ステアリング・グループ)

【教育学では、授業を進めるときの目安とする児童たちをステアリング・グループと呼んでいる。小学校では「中の下位」がステアリング・グループになっている割合がもっとも多く(47.4%)、5割弱になっている。「中の

下位」「下位」といった平均よりも下位の成績の児童をステアリング・グループにしている割合は、学年が上がるごとに少なくなり、1年生が57.8%であったのが、6年生では47.4%と減少する。】

Q6. 授業を進めるときの目安としている児童についておたずねします。あなたは、どのくらいの理解度の児童に標準をおいて授業を進めていますか。

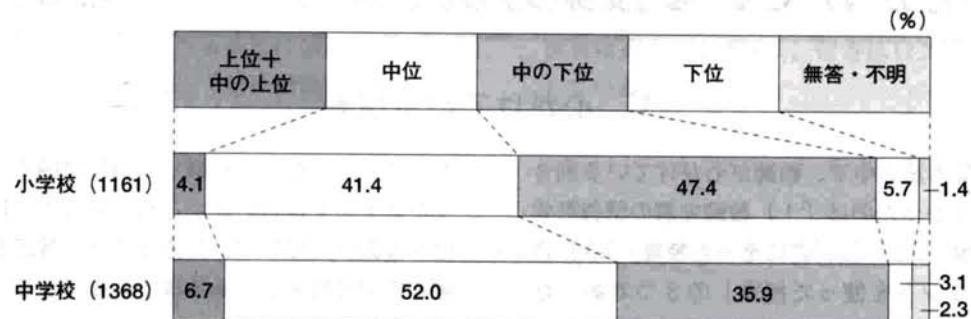
理想としては、すべての児童が理解したときに、教師は次の単元に授業を進めるのが望ましい。しかしながら現実問題としては、すべての児童がわかるまで教えていたのでは、授業がなかなか先に進まないし、できる児童はお客さんになってしまう。教育学では、授業を進めるときの目安とする児童たちをステアリング・グループと呼んでいる。本調査では、成績に着目し、どのくらいの成績の児童を授業を進める目安、すなわちステアリング・グループとしているかたずねている。

図3-8は、ステアリング・グループをたずねた結果を示してある。小学校では、成績上位・中の上位をステアリング・グループにしていると答えた割合は4.1%であった。そして、中位が41.4%と4割強、中の下位が47.4%と5割弱になっている。下位、すなわちすべ

ての生徒が理解したときに授業を進める目安にしていると答えた割合は5.7%であった。中学校との比較では、小学校では中学校よりもステアリング・グループを成績が下位のほうに設定している。

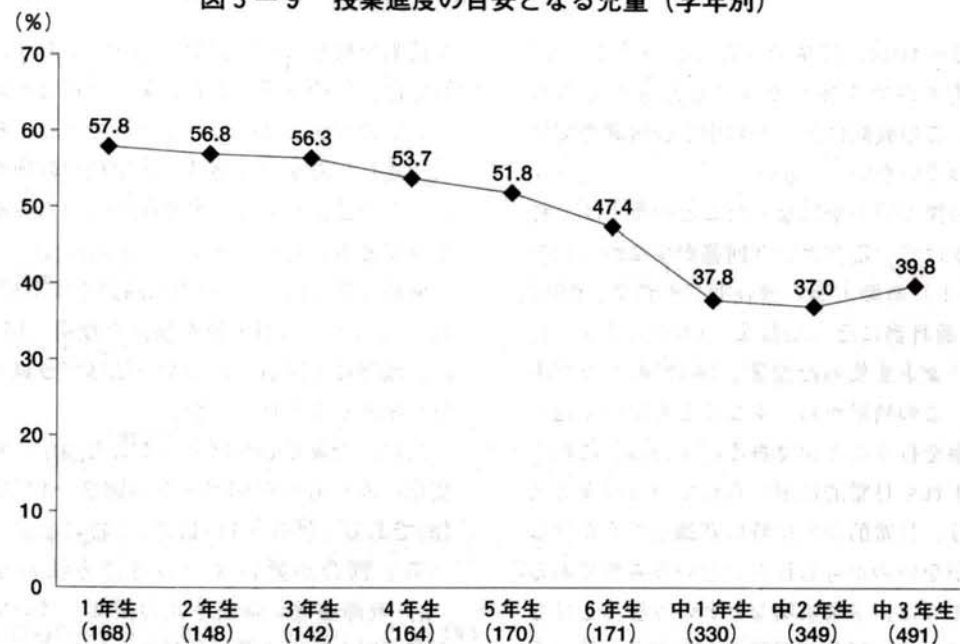
図3-9は、「中の下位」と「下位」にステアリング・グループを設定している割合を合計した値の推移を学年別にみたものである。この図をみると、「中の下位」「下位」といった平均よりも下の成績の児童をステアリング・グループにしている割合は、学年が上がるごとに少なくなっていく。1年生が57.8%であったのが、4年生で53.7%、5年生で51.8%、6年生では47.4%と減少する。この数字をそのまま読むと、6年生の教室では、半分以上の児童が授業を確実に理解している割合は、全体の半分以下になってしまっている。

図3-8 授業進度の目安となる児童(小・中比較)



注) ()内はサンプル数。

図3-9 授業進度の目安となる児童(学年別)



注1) ()内はサンプル数。

注2) 数値は「中の下位」と「下位」の合計。